

平成 30 年 5 月 16 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02970

研究課題名(和文)漢字文化圏における骨卜と亀卜に関する総合的研究

研究課題名(英文)Overall study about Kotsuboku and Kiboku in a Kanji cultural sphere

研究代表者

近藤 浩之(KONDO, Hiroyuki)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：60322773

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、弥生時代の骨卜(太占)における、鹿の肩甲骨の焼灼方法について、調査し、考察し、再現実験を行った。調査対象は、鳥取青谷上寺地遺跡出土の卜骨、奈良唐古・鍵遺跡出土の卜骨、長崎吉岐島出土の卜骨である。伴信友『正卜考』の記述を手がかりに、鹿(または猪)の肩甲骨による占いの考察を行った。

鹿の肩甲骨を、土に埋める方法と水に漬ける方法と、両方の方法を試み、その骨を、モグサで焼灼する方法を考察した。再現実験では、モグサを用いて、鹿の肩甲骨を、同時に2～3箇所焼くことにより、骨に生じる亀裂をコントロールすることを再現できた。再現実験の結果、出土卜骨の焼灼痕と非常に類似する焼灼痕が得られた。

研究成果の概要(英文)：It was investigated, it was considered and a reproduction experiment was made about cauterization method of a scapula of a deer in Kotsuboku骨卜(Futomani太占) in the Yayoi Era by this research. Investigation objects are Bokukotsu卜骨 of Tottori Aoya青谷 Kamizichi上寺地 remains unearthing, Bokukotsu卜骨 of Nara Karako-Kagi唐古・鍵 remains unearthing and Bokukotsu卜骨 of Nagasaki Ikishima吉岐島 unearthing. We got a clue from the description of "Seibokukou 正卜考" written by Nobutomo-Ban伴信友.

A way of both of the way to bury a scapula of a deer in earth and the way to put it in water was tried. The way to cauterize the bone by moxa was considered. Using moxa and it was reproduced to choose a scapula of a deer as baking 2 or 3 points at the same time and control the crack which occurs to a bone. As a result of the reproduction experiment, we got a very similar cauterization scar to a cauterization scar of unearthing Bokukotsu卜骨.

研究分野：中国哲学

キーワード：骨卜 亀卜 太占 弥生時代 周易 卜筮 モグサ 焼灼

1. 研究開始当初の背景

(1) 中国文明は、漢字をとめないながら各地域に伝わったが、漢字が伝来する前に日本人が文字をもたなかったことは確かだろう。斎部広成『古語拾遺』(807)に「上古の世未だ文字あらず、貴賤老小、口口に相伝へ、前言往行、存して忘れず」とあり、唐・魏徵(580~643)の『隋書』倭国伝に「倭国は百済・新羅の東南にあり。……文字なし、ただ木を刻み縄を結ぶのみ。仏教を敬す。百済において仏教を求得し、始めて文字あり」とある。大島正二『漢字伝来』(岩波新書、2006年)に考察されるように、日本人が漢字と最初に出会った機会を推測できる拠所は、一つは福岡県志賀島で発見された「漢委奴国王」と陰刻された金印がまさに南朝宋・范曄(398~445)『後漢書』倭伝に「建武中元二年(57)、倭の奴国、貢を奉じて朝賀す。……光武、賜うに印綬を以てす」とあることを証したこと。もう一つは、漢の天下を一時ほろぼし新を建国した王莽(在位8~23)が天鳳元年(14)に鑄造して十二年間流通したという「貨泉」の二字のある銅銭が長崎県シゲノダン遺跡などの弥生遺跡から出土したこと。そして、倭が文献に初めて登場する、班固(32~92)『漢書』地理志「楽浪の海中に倭人有り、分かれて百余国と為る。歳時を以て来り献見す」の記事から、前漢時代に倭の存在が認識されていたことが分かる。前漢時代(日本の弥生中期)が中国文明と日本文化とが互いを異質の文化として認識し交流し始めた時期と考えてよい。『史記』太史公自序「三王不同龜、四夷各異卜、然各以決吉凶」の「各おの卜を異にす」る「四夷」に「倭」も含まれるだろうか。そして新から後漢にかけて漢字文化を受容するようになり、弥生後期の日本人は、大陸からの借り物とはいえ文字をもつようになる。(近年、AMS法を用いた年代測定により、水稻耕作の開始時期が紀元前約1000年前後であるという研究成果が発表され、弥生文化の始まりが従来よりも遡る可能性が出てきたが、後漢・三国時代は従来と同じく弥生後期と考えてよい。)しかし当初、金印や貨幣に刻まれた漢字は、古代日本人の目には、ただ権威の象徴あるいは呪力をもつもの、装飾的な模様としか映らず、文字としての機能など全く理解できなかっただろう。さて、外来の難しい漢字の使用や習得には長い期間を要しても、技術や道具の使い方などは、文字は理解できなくとも伝わる。日本の弥生時代の骨卜(太占)文化は、漢字伝来よりも早く、中国の卜筮文化の影響を受けて変化する可能性がある。中国では殷代の龜甲や獸骨を灼いて生じた兆象によって吉凶を判断する「卜」、続く周代の蓍草(めどき、筮・策も同義)を数えることで得られた卦象によって吉凶を判断する「筮」がある。この卜筮文化は春秋戦国時代にも継承され、前漢時代には卜はほとんど行われなくなるが、筮は『周易』(六十四卦と卦爻辞)とその『易』

伝(十翼)として体系が確立され、さらに陰陽五行説や曆法などの当時の科学思想や数術思想を総合的に吸収して拡大発展していく。一方、日本は、陳寿(233~297)の『三国志』魏書・東夷伝の倭人の条に「其の俗、事を挙げ行来するに、云為する所有れば、輒ち骨を灼いて卜し、以て吉凶を占う。先ず卜する所を告ぐ。其の辞は令龜の法(中国の龜卜)の如く、火拆を視て兆を占う」、また裴注に「『魏略』に曰く、其の俗、正歳四時を知らず」とある。中国の龜卜とは似て非なる獸骨卜を行い、曆も持たない弥生人の姿が見える。この倭人の条によれば、倭国と魏との間で、景初二年(238)「その年十二月、詔書して倭の女王に報じて曰く……今汝を以て親魏倭王と為し、金印紫綬を仮し、……銅鏡百枚……を賜う」をはじめ、正始元、四、六、八年(240、243、245、247)とたびたび使者が往来する。正始元年の国書に「倭王は、使に因って上表文をたてまつり、詔恩を答謝す」とあるから、中国皇帝を中心とする漢字文化圏に足を踏み入れた日本人が早くも漢字使用を余儀なくされていく様に思いをいたすべきである(大島正二前掲書参照)。

(2) 江戸時代の国学者・伴信友(1773-1846)は、「龜卜とは云へ、まことは上代の鹿卜法の遺伝はれるものなる事の著ければ、……かのかきまぎらはしたる漢ぶり説のさかしらを、古実もて撰りすつときは、まことの上代の卜法のそれと知らるるを、今試に辨へ証せる此書になむある」として『正卜考』(『伴信友全集』巻二、ペリカン社、1977年所収)を著して、漢字文化に染まる前の日本古来の卜法を考察する。伴信友のこの試みは、まさに弥生時代の骨卜の実態を示す現在の考古学的成果と突き合わせることで再検証されなければならない。

(3) 宮崎泰史「日本の卜骨研究の現状について 今後の日韓卜骨の比較研究を前提に」(『東亞文化』15号、東亜細亜文化財研究院、2013年12月)によれば、弥生時代から古墳時代前期の卜骨出土例は、現在、43遺跡472点にのぼる。出土例の約85%が鹿・猪の肩甲骨であり、愛知県を境に西日本は猪、東日本は鹿の利用割合が多くなる。整理・分類によれば、肩甲骨を使った骨卜のタイプは、<時期、地域、焼灼を加える位置、整地、鑽の有無・形状>によって ~ タイプに分けられる。日本での卜骨の登場は、弥生前期で、中足骨・橈骨・肢骨である。肩甲骨を使用するようになるのは弥生中期前半(タイプ、灼面ト面一致)で、奈良県唐古・鍵遺跡、大阪府亀井遺跡、鬼虎川遺跡、鳥取県青谷上寺地遺跡で出土している。同じ遺跡から出土しても中期中頃~中期後半のタイプ(灼面ト面不一致)とは明確に分離できる。弥生後期初頭に整地(ケズリ)を施すタイプ、その発展形で外側面をケズリによって除去、平坦

化する弥生後期後半～古墳前期初頭の a タイプ(主に西日本)がある。古墳前期初頭のタイプ(不整形円形を呈する粗雑な鑽)以降、東西の差はみられなくなり、その発展形で古墳前期～中期のタイプは平面が円形、断面が半円形を呈する整美な鑽を設ける。古墳後期(6世紀以降)のタイプ(内外面に整地、海綿質部分に長方形の鑽を連続して彫り焼灼、鑽は大半が外側面に)は、従来の骨卜法を払拭するために中国の「亀卜の法」を復古調に再現し、全国的な規模でト占法を統一するために採用した可能性も十分に考えられ、新たにウミガメを採用し、ウミガメの入手困難な地域で従来から使用していた鹿・猪に加えて牛・馬の家畜を使用するようになった(以上、宮崎見解の要約)、『三国志』魏書・東夷伝の倭人の条の「骨を灼いてトし、……火拆を視て兆を占う」は弥生後期後半～古墳前期初頭の a タイプあるいは古墳時代前期初頭のタイプ(不整形円形を呈する粗雑な鑽あり)の状況を伝えるか。一方、坂出祥伸「獣骨トと甲骨トのト法」(『道家・道教の思想とその方術の研究』第二章、汲古書院、2009年)によれば、後漢の王充の著『論衡』ト筮篇には子路が孔子に「猪肩羊膊、以て兆を得べく、藿葦藁芎、以て数を得べし。何ぞ必ずしも蒼龜を以いん」と問うた伝説を引用し、前漢の淮南王劉安の編纂『淮南子』説林訓に「牛蹠蝨鬚も亦た骨なり、しかれども世灼かず」とあるように、前漢時代にはもはや中原では獣骨トはすたれていたようだ。また小坂眞二「古代・中世の占い」(『陰陽道叢書4特論』所収、名著出版、1993年)を参考に問題点を整理し、五世紀頃から対馬・壱岐などで行われる亀トを、タイプの骨トや『新撰亀相記』(『唐六典』や、『天中記』所引と同内容の『龜經』本文に基づく部分がある)の内容と比較検討する必要もある。また最近(2010年以降公表・出版)の中国出土資料、清華大学蔵戦国簡『筮法』や上海博物館蔵戦国楚簡『卜書』をも視野に入れる考察が必要だろう。

2. 研究の目的

(1) 東アジア恠異学会編『亀ト 歴史の地層に秘められたうらないの技をほりおこす』(臨川書店、2006年)は、亀ト書の内容を占いの技法(技術的側面)とし、亀の灼甲実験も含めて各方面から検証した画期的な研究成果の記録であり、大いに参考にする。亀トを軸に行われた件の研究と検証を、今度は日本弥生時代の骨トを中心に、特にその焼灼方法に焦点を絞って調査し、再現実験によって検証するのである。

(2) より具体的には、伴信友『正ト考』が『対馬国ト部亀ト次第』など伝来のト書を軸にまとめた獣骨ト(主に鹿ト)の技法(『古事記』天石屋段の「真男鹿の肩」の太占の再現)を、弥生時代の骨ト遺物(遺跡出土骨ト)

と比較・検討する。さらに現代のエゾシカ肩骨(あるいはイノシシ肩骨)を使った焼灼再現実験によって、特にモグサを用いて焼灼した可能性を探り、出土ト骨の一部にはその可能性が非常に高いものがあることを検証し、明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 全体として予算規模が小さい中で研究活動調査・実験・考察を行うので、その対象をできるだけ限定して、ト骨の焼灼の痕とその焼灼方法に絞り込んで、調査・実験・考察を実施することにした。

(2) <文献考証>として、伴信友『正ト考』に引用された古書・伝書と、それに基づく伴信友自身の考察を手がかりとして、鹿や猪の肩甲骨を整えた。例えば、エゾシカ肉加工販売業者の協力により、エゾシカの肩甲骨を12点(牡2才・3才・4才・6才の左右、牝1才・4才の左右肩骨)入手し、うち6点は平成26年6月13日に土に埋め、『正ト考』の「牡鹿の左肩の骨を取て、百日ばかり土に埋め、臭気を去り、又雨をそそぎて後これを用いる。脂気あれば、ト文現れず。」を検証した。また2点(牡2才右・3才左)は平成26年7月24日から沢の水に漬けて、『正ト考』の「信友云わく、清流に漬け置けば、はやく臭気去るなり。」を検証した。

(3) <現地調査>として、奈良県の唐古・鍵遺跡出土のト骨(シカ・イノシシ)、鳥取県の青谷上寺地遺跡出土のト骨、長崎県壱岐島出土のト骨・ト甲(カラカミ遺跡・原ノ辻遺跡出土のト骨、串山ミルメ浦遺跡出土の亀ト甲など)を熟覧調査した。

(4) <再現実験>として、モグサによる焼灼実験については、その先例が木村幾多郎によって行われている。すなわち「唐神出土イノシシ骨は、ほぼ円に近い漆黒色の焼灼痕を呈しており、これからヒントを得て、モグサをほんの一つまみ肩甲下窩に置いて火をつけ焼灼を試みた。1回ではだめで、5～6回同じ事をくり返すと、裏面(外側面)に火垢が走り(長9mm)褐色に変色が見られた(経3mm)。焼灼面は、モグサの置き方、量によってその痕跡の大きさは異なるが、前記の例では、経7mmの黒色の周囲に幅1.5mmの変色が見られた。モグサによって得られた痕跡は、唐神遺跡出土イノシシ肩甲骨ト骨の痕跡に近いものである。」と記す(「長崎県壱岐島出土のト骨」、『考古学雑誌』第64巻第4号、日本考古学会、1979年3月、13頁)。これを参考に、後述の再現実験の計画を立てた。

4. 研究成果

(1) <モグサによる焼灼実験>主として宮崎泰史「日本のト骨研究の現状について 今後の日韓ト骨の比較研究を前提に」(掲掲)

に云う タイプ（弥生時代中期中頃～中期後半、灼面不統一）に分類されるト骨の焼灼とその痕を再現する実験を行い、次のような結果を得た（後に唐古・鍵考古学ミュージアムの図録に載る「【コラム5】唐古・鍵出土ト骨の焼灼再現実験始末記」を参照）。

2016年9月1日10時30分頃、唐古・鍵ミュージアム（奈良県田原本町）の中庭において、科研基盤(C)研究班（石井行雄・小杉康・近藤浩之・水上雅晴）は、田原本町教育委員会の藤田三郎氏立ち会いのもと、ト骨の焼灼を再現する実験を行った。

再現対象の骨（X）は、弥生時代中期と推定されている鹿の右肩甲骨で、「唐古・鍵 37次、（遺物）SK-2130、第10層黒灰粘、（地区）B-1001、（年月日）890402、（番号）946」のラベルがある（図録1-31参照）。

実験で使用した材料は、エゾシカ（牡2オ）の右肩甲骨（Y）（約百日、沢の水に漬けて肉や腱や臭気を除去した後、一年十ヶ月位陰干して保管していたもの）、モグサ（2016年5月に鳥取市内で採取した野生のヨモギ草を、約1ヶ月乾燥させた後、ビニール袋に入れて保管していたもの）、線香（市販のもの、着火用）である。

骨（X）の焼灼痕と同様の箇所、骨（Y）上において予め鉛筆で×印（6箇所+2箇所）を付けておき、骨（Y）の内蔵側にあたる内側面を、親指先大のモグサで一度に2箇所ずつ、肩甲骨の足側から肩側へ向かう順序で、焼灼した。最初の2箇所を焼灼しただけで、その2箇所を通るような亀裂が走った。

以後、順次2箇所ずつ、そして最後の2箇所をひとまとめに大きめのモグサで焼灼した結果、骨（Y）に骨（X）とほぼ同様の焼灼痕と亀裂を再現することができた。

再現実験の結果は、【図一】（内側面）・【図二】（外側面）の写真の通り。いずれも左が出土ト骨（X）、右が再現結果の骨（Y）である。この再現実験によりト骨（X）の焼灼痕に非常に近い結果を得ることができた。したがって、【図三】のようなト骨（X）の焼灼痕は、モグサによるものである可能性が高い。また、同様の材料を弥生時代中期に入手可能であったとすれば、本実験と同様の手法が使われた可能性も高いと思われる。

【図一】



【図二】



【図三】



（2）＜熟覧と実験から＞特に奈良県唐古鍵遺跡と鳥取県青谷上寺地遺跡との出土物、特に完形品を熟覧し、それを参考にシカ・イノシシの肩甲骨で、焼灼実験を繰り返した結果、ほぼ次のようなことがわかった。

大きな焼灼痕のある場合、基本的に2～3箇所が一組になっている。すなわち、モグサを用いて同時に2～3箇所焼灼した状況に類似する。

肩甲骨を2～3箇所一組で焼灼すると、ほとんど、その2～3箇所を繋ぐまたは通る形で亀裂が入る。

肩甲骨にケズリ等の加工を施さず、その地域に生ずるヨモギ草を乾燥させるだけの素朴なモグサを用いて焼灼するだけで、十分に亀裂を生じさせることができる。

肩甲骨の焼灼面が、内側にあるものと外側にあるものとどちらも遺存する。なお、牡牝・右左による相違もあまりないようである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

— 近藤 浩之・石井 行雄、骨トにおける肩甲骨の焼灼法に関する試み、中国哲学、査読有、45号、2018、未定

— 橋本 裕行、熊野信仰と大峯駒道の考古学、熊野学研究、査読無、5号、2017、pp.1-9

— 橋本 裕行、温泉考古学の視点、月刊考古学ジャーナル、査読無、693、2017、

pp.11-14

- 橋本 裕行、明治期の日本画に描かれた考古資料、考古学の諸相、査読無、第4巻、2015、pp.355-366
- 橋本 裕行、弥生時代の造形・文様・絵画、日本美術全集、縄文・弥生・古墳時代 日本美術創世記、第1巻、査読無、2015、pp.180-192
- 近藤 浩之、擲錢法に對する桃源瑞仙の講抄、中国思想史研究、査読無、36号、2015、pp.1-42

〔学会発表〕(計7件)

橋本 裕行、絵画に見る弥生人の精神世界、奈良県立万葉文化館第6回主宰共同研究「神話の視覚化に関する比較文化的研究 記紀万葉を軸に」、2018年3月18日、万葉文化館会議室

橋本 裕行、葛城山頂採取の石器について 付久米の岩橋・戒那山寺跡、『第28回山の考古学研究会』山の考古学研究会、2017年11月11日、奈良県社会教育センター小会議室

近藤 浩之、田中穰氏旧蔵典籍古文書『周易』の装幀と白点、「廣橋家旧蔵文書を中心とする年号勅文資料の整理と研究」第二回研究会、2016年3月29日、国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)

石井 行雄・近藤 浩之、田中本『周易』(重文)のもう一つの顔 田中本『周易』白点調査中間報告、「廣橋家旧蔵文書を中心とする年号勅文資料の整理と研究」第二回研究会、2016年3月29日、国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)

近藤 浩之、「田中穰氏旧蔵典籍古文書」中の『周易』について、北海道中国哲学学会平成27年度11月例会、2015年12月4日北海道大学(北海道札幌市)

山際 明利、洗心洞筭記の太虚説、北海道中国哲学学会第45回研究発表大会、2015年8月30日、北海道大学(北海道札幌市)

近藤 浩之、周縁文化より考える占卜の技術と文化、東方学会国際東方学会議(国際学会)、2015年5月15日、日本教育会館(東京都千代田区)

〔図書〕(計2件)

池田 知久・水口 拓壽(編) 武田 時昌、近藤 浩之 他(分担執筆) 汲古書院、中國傳統社會における術數と思想、2016、259(217-246)

湯浅 邦弘(編著) 鶴成 久章、近藤 浩之 他(分担執筆) ミネルヴァ書房、テーマで読み解く中国の文化、2016、424(279-302)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 浩之(KONDO, Hiroyuki)
北海道大学・文学研究科・教授
研究者番号：60322773

(2) 研究分担者

小杉 康(KOSUGI, Yasushi)
北海道大学・文学研究科・教授
研究者番号：10211898

山際 明利(YAMAGIWA, Akitoshi)
苫小牧工業高等専門学校・創造工学科・教授
研究者番号：20249717

石井 行雄(ISHII, Yukio)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：60241402

水上 雅晴(MIZUKAMI, Masaharu)
中央大学・文学部・教授
研究者番号：60261260

佐野 比呂己(SANO, Hiromi)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：60455699

橋本 裕行 (HASHIMOTO, Hiroyuki)
奈良県立橿原考古学研究所・企画部企画
課・課長
研究者番号：80270776

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

細井 浩志 (HOSOI, Hiroshi)

鶴成 久章 (TSURUNARI, Hisaaki)